

世の為、人の為に何か良いことをしたい良いことを仕様、と言う気持ちしが仏心であり、菩薩行であろうと自分は思っています。先月本四国八十八ヶ所の巡拝をして来ました。今年は**空海大師様が霊場をお開きになられて千二百になります**。法然上人が亡くなられて約八百年、法然上人も四国高松に流罪の身になりましたが、それより四百年も前に空海大師様が活躍された時代の自然、社会環境を想像するだけで実感を得ることはできません。さぞや大変であったろうと空想するだけです。現在に於いては四国霊場を巡拝するのが随分楽になりました。ただ昔と今とでは巡礼に出掛けられる人達の心構えはずいぶん違ってしまったのではないのでしょうか。昔の巡拝は死と隣り合わせであったかと思われれます。今でも日本全国に霊場は数々ありますが四国霊場は最高峰であると思います。十二日間と言う短い期間ですが同行と共に巡錫し、八十八番で味わう感無量、今回も心の持ちようで物欲から離れ、社会情勢も知る必要もなくなり、佛と我が主役の参拝となり、人間関係も大きく変わる事を知りました。毎回おなじでは無いものの味わい深い事には変わりありません。**二期一会の佛縁で、会えて嬉しき人となり**。体験したことだけが身に付くわけですから。

徳富蘆花の「吾家の富」の中に「象は十坪に過ぎず、庭は唯三坪。誰か言う、狭くして且陋なりと。家陋（いへんろう）せまいなりと雖も、膝（ひざ）を容（ゆる）め可（べ）く、庭狭きも碧空（あおぞら）仰（あお）ぐ可（べ）く、歩（ほ）して永遠（えいゑん）を思うに足（た）る。神の月日は此處（こゝ）にも照（て）れば、四季も来り見舞（みま）い、風、雨、雪、霰（あられ）かはるる至りて興（きょう）浅（あ）からず。蝶（ちょう）兒（ご）来りて舞（ま）い、蟬（せみ）来りて鳴（な）き、小鳥（せうじょう）来りて遊（あそ）び、秋蛩（あきせう）（オオロギ）また吟（ぎん）ず。静（しず）かに観（かん）ずれば、宇宙（うちゅう）の富（とみ）は殆（た）んど三坪（さんへい）の庭（にわ）に溢（あふ）るゝを覺（おぼ）ゆるなり。」と狭きことを悲（かな）しむよりも天地自然（てんちしぜん）の広（ひろ）大（だい）さを感じ（かん）受（じゆ）で可（べ）き喜（よろこ）びがひしひしと伝（つ）わってきます。法然上人様も立派（りっぺい）な佛閣（ぶつかく）よりもお念仏（ねんぶつ）の聲（こゑ）がするところが遺跡（いせき）であるとおっしゃいました。昔（むかし）から人間座（にんげんざ）って半畳（はんだじよう）、寝（ね）て一畳（いちじよう）と言（い）います。法然上人様（はつぜんじんのうさま）は行住坐臥（ぎやうじゆうざが）の称名念仏（しょうみやうねんぶつ）を提唱（ていしょう）され日に六万遍（ろくまんべん）の念仏（ねんぶつ）を称（な）えられました。近年（きんねん）でも増上寺（ぞうじょうじ）の前御法主（ぜんごほうしゆ）であられました故成田有恒（せむつたのりつね）寺内（じうち）大吉（たききち）上人様（じんのうさま）は一日（いちにち）に三万遍（さんまんべん）のお念仏（ねんぶつ）を称（な）えてみえました。現在（げんざい）でも浄土宗（じやうどしゆ）の重鎮（じゆうちん）と言われる上人様（じんのうさま）達は法然上人様（はつぜんじんのうさま）の志（し）を忘（わす）れず、日課（にっか）念仏（ねんぶつ）数万遍（じふまんべん）を称（な）えてみえるはず（はず）です。ただ、平凡（へいべん）なる我々（われわれ）には「極楽（ごくらく）も地獄（ぢごく）へ行くも念佛（ねんぶつ）の数（かず）で決（き）まらずなぬ阿弥陀（あみだ）」です。数（かず）にのみこだわ（たわ）り、念仏（ねんぶつ）が歌（うた）に成（な）ってはいただけません。健康（けんこう）を害（がい）せば身体（からだ）に力（ちから）が入（い）らず、念仏（ねんぶつ）の聲（こゑ）も小さ（ちひ）さくな（な）ってしま（しま）います。声（こゑ）の張（は）りと大き（おほ）きさは健康（けんこう）のバロメーター（ばろめたー）になります。近く（ちかく）にお見（み）えの方（かた）で、声（こゑ）が弱（よわ）々（々）しく成（な）ってき（き）たら元氣（げんき）づけてあげ（あ）げま（ま）し（し）よう。